

『スパイ』における二重構造—揺れる価値観と次世代への布石

飯島昭典

裏切り、暗殺、卑怯、義務、敵、味方。人がスパイと聞いて連想する語はいかなるものであろうか。ジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper, 1789-1851) の『スパイ』 (The Spy, 1821)¹ はタイトルの示すとおり、一人のスパイハーベイ・バーチ (Harvey Birch) の勇気、活躍、そして遭遇する様々な危険を描いた愛国心あふれる作品になっている。彼はイギリスのスパイとして身を追われ、その実体はアメリカの二重スパイという状況設定である。この一人の主人公の置かれた、二重の役割、すなわちイギリスのスパイ、そして真実はアメリカのスパイであるという二重構造がこの『スパイ』を読み解くうえで非常な意味を持ってくるのである。

『スパイ』には様々な二項対立要素、あるいは反発するいくつもの二重構造が溢れている。作品の舞台は 1780 年の終わり、まさにアメリカが本国イギリスからアメリカが独立を勝ち取ろうとして争っていた時期である。イギリス対アメリカ、既にここに二項対立要素を我々は見つけることができるのである。そして、登場人物のサラ・ウォートン (Sarah Wharton) はイギリスの軍人であるウェルメア大佐 (Colonel Wellmere) を愛し、フランシス・ウォートン (Frances Wharton) はアメリカの軍人ペイトン・ダンウーディー (Peyton Dunwoodie) を愛す。ここにもこの要素を見てとることができる。そしてあまり二重構造には関係ないと思われるヘンリー・ウォートン (Henry Wharton) ですら、変装という真実と見かけという両方を含む二重構造のいでだちで登場するのである。ハーパー (Harper) は真実はワシントン (Washington) である。ハーパーの真実と虚飾これも二項対立要素である。

二項対立的要素は、こうした人物設定にとどまらない。ドナルド・リンジ (Donald Ringe) が言うように、クーパー文学では「物理的設定こそがテーマの発展にとって重要」 (“ important in the development of his theme is the physical setting ”) (28) なのである。この作品はハーパーとへ

ンリーが「だんだん強くなる激しい冷たい湿気のある東風」(“easterly wind, with its chilling dampness and increasing violence”)(9)の中を一時の宿と休息を求めてやってくるという出だしである。外は「嵐」(“storm”)(9)の前兆を表し、まさに「夜の暗さ」(“darkness of the evening”)(9)と「雨」(“rain”)(9)が支配する黒い気持ちを萎えさせる状況なのである。

ところがハーパーとヘンリーを迎えた室内の様子はどうであろうか。室内では料理が出され、ワインを互いに飲み支配的な特徴というのは「静かな楽しさ」(“silent sense of enjoyment”)(17)と「静かな快適さと温かさ」(“quiet comfort and warmth”)(17)なのである。このように外の世界と内の世界では全く逆の描写になっているのである。クーパー文学の状況設定の重要性を考慮に入れたならこうした室外と室内の、激しさと暖かさ、冷たさと暖かさという二項対立的要素は、先に述べたようにテーマに深くかかわってくるはずなのである。

このように人物設定や状況設定に見られる作品の二重構造、二項対立要素は一体何を表すのか。そして表す意味が、アメリカ文学史の中でどのように位置づけられるのか。この問いに答えを出すのが、このペーパーの目的である。

まず考えなければならないのは、『スパイ』が出版された1821年当時の社会状況である。第二次米英戦争に勝利し、実質的な独立を手に入れた若きアメリカは自信と長い間の対英コンプレックスを払しょくした時代のように思える。はたして1820年代1830年代というのは勝利に酔いしれたアメリカ人が自信をもって国造りをしていたのだろうか。

1837年エマソン(Emerson)は自身の著作「アメリカの学者」(“The American Scholar”, 1837)の中でイギリスからの精神的独立、自らの文化の創造の重要性について声高に宣言している。「自らの足で歩き、自らの手

で働き、自らの心を語ろうではないか」(“ We will walk on our own feet; we will work with our own hands; we will speak our own minds”)(69)と感動的な結びを「アメリカの学者」にもってきているのである。当然エマソンの心にあるのは自信に満ちたアメリカ像であり、栄光のアメリカである。

そして、米英戦争の最中に書かれ、1831年に国歌として認められた「星条旗」の冒頭にも次のような歌詞が見られる。

Oh, say can you see, by the dawn's early light,
What so proudly we hail'd at the twilight last gleaming?
Whose broad stripes and bright stars, thro' the perilous
fight

O'er the ramparts we watch'd, were so gallantly streaming?
(215-6)

どうだ見えないか、今の朝焼けの光のなかで
夕暮れの薄明かり時に、我々が誇りもって掲げた
その広い縞模様と明るい星印が危険な戦いをくぐりぬけ
見上げる城壁の上で勇壮に、たなびいているのを。

朝焼けが時代を表す若きアメリカの時代であり、人々は国の誇りである星条旗を迎えたのである。人々はこの時代愛国心に酔い、自信にあふれた1820年代、1830年代のように思える。

しかし、ここで視点を変えてみよう。クーパーと同時代の作家、ワシントン・アーヴィング(Washington Irving, 1783-1859)を考えてみよう。彼は当時の売れっ子作家であり、非常な人気を持った作品『ジェフェリー・クレイヨ

ン氏のスケッチブック』(The Sketch Book of Geoffery Crayton, Gent., 1819)を書き残している。語り手クレイヨン(Crayon)は、上に示したような自国アメリカに対して同じような感情を示しているのだろうか。

そうではない。彼は自分の地をイギリス人の文体で描いているのである。クレイヨンはイギリス人に対して次のようにコメントする。

Where no motives of pride or interest intervene, none can equal them for profound and philosophical views of society, or faithful and graphical descriptions of external objects; . . . (35)

動機に自負と利益がかかわらない時には、その深い哲学的な見方で社会を見て、そして事物に関しては忠実で精彩を持った見方で見ると。この点においては並ぶものがないのだ。

そしてクレイヨンはイギリスを「古く整った社会」(“ an old, high-finished society ”) (37)としているのである。

このイギリスに対してのプラスイメージは一体何を表すのだろうか。そしてアメリカ本国での『スケッチブック』の爆発的な売り上げは、いったい何を意味するのだろうか。それはアメリカ人によるイギリスへの郷愁にも似た憧憬である。ピューリタン達がアメリカにやってきて200年がたち、アメリカ人はここにきてやっとイギリスに対して憧憬を覚え始めてきたという事実を見逃してはならない。

『スパイ』が書かれた1821年はまさにこのアメリカへの愛国心とイギリスへの郷愁という二つの感情が交差する時代風潮であったと言って過言ではないだろう。アメリカがアメリカになっていない、イギリスという父親から離れた

若きアメリカがまだ子供の面影を残している時代である、と言えるだろう。つまり、不確定、不透明な若きアメリカの時代である。この時期に『スパイ』は書かれたのである。

不確定、不透明の時代思潮にクーパーの描く女性像とはいかなるものであろうか。この事はアメリカ対イギリスという二つの女性像の中に表現されている。カイ・セイムア・ハウス (Kay Seymour House) は作品中での女性の働きは「クーパーが一連の冒険を引き出す上で単なる物語上の伏線を作るにすぎない」(“ their experiences form no more than a narrative line to which he [Cooper] can attach a series of discrete adventures ”) (24) としているが、決してそんな事はない。² 『スパイ』論を進めるにあたって、クーパーの描く女性像というのは極めて重要な働きをしているのである。

イギリスの軍人を愛してしまうサラはハーベイ・バーチによってウェルメア大佐が重婚の罪を犯していることを知り、「恐ろしいほどに笑い」(“ smile so horribly ”) (265) 狂人化してしまう。そして彼女が感じるのは、自分でも認めているように「悲しみ」(“ grief ”) (265) だけである。

対照的なのは妹フランシスである。彼女はアメリカ軍人であるダンウーディーを愛しそして結婚後息子であるウォートン・ダンウーディー (Wharton Dunwoodie) をもうけているのである。フランシスは幸せな生活を手に入れたと言っているだろう。

イギリスという属性に対して敬愛を示したものは不幸になり、アメリカという属性に対して敬愛を示したものは幸せになるというこの形は当然のことながら、クーパーのアメリカ賛美という形に他ならない。クーパーの示すアメリカイズム、ナショナリズムがここにあるのである。

フランシスは時折、真実を見抜く眼力を見せる。第3章でバーチがウォートンとの会話の中で見せる微妙な変化に彼女は目ざとく反応し、見逃さなかった。

彼女はまさに「バーチの見せる変化に気づいた唯一の観察者」(“ the only observer of the change in the manner of Birch ”)(39)だったのである。また第8章で恋人ダンウーディーの様子に反応する彼女をここで少し引用してみよう。

She recognize her lover, and, with the truth, came other recollections that drove her to the room, with a heart as sad as that which Dunwoodie himself bore from the valley. (110) 彼女は恋人に真実をもって気づいた。ダンウーディーが谷から持ってくる悲しみと同じ悲しみで様々な思いを抱きながら部屋へと下がった。

この「ダンウーディーが谷から持ってくる悲しみ」というのは当然戦場における様々な悲しみに他ならない。フランシスはダンウーディーとこの悲しみを共有しているのである。フランシスはこのことを「真実をもって」感じるのである。「真実が決して実現しない人生の予感」(“anticipation of life which the truth can never realize ”)(106)を虚しく抱いているサラとは全く正反対のフランシスである。

真実を見抜けるフランシスの洞察力というのは、バーチに対しての洞察力ということにも繋がっていく。彼女は「ハーベイ・バーチは良心を持っていないわけではないわ。少なくとも時折、その表れを見せるわ」(“ Harvey Birch is not without good feeling; at least, he has the appearance of them at times ”)(56)とバーチの深い人柄、うさんくさい行商人としての彼の外見上以上のものを見出すのである。スパイとしての任務からくる「行動を包む彼の鋭さと神秘性」(“ his acuteness, and the mystery which

enveloped his movements ”) (33) を彼女ははっきりとは意識することは出来ずとも、感じるだけの洞察力は有しているのである。

バーチは責任という荷物を持った行商人である。彼は「自分の持つ荷物の重さに対して手軽に持つだけの強さを持っていないように思える」 (“ his strength seemed unequal to manage the unwieldy burden of his pack ”) (35) がしかし、彼は「羽毛が詰まっているかのような見かけの簡単さで、そして器用さで背負ったり下ろしたり」 (“ he threw it on and off with great dexterity, and with as much apparent ease as if it had been filled with feathers ”) (35) する事が出来るのである。この荷物に対してのバーチの描写は彼の任務、ヘンリーの救出、愛国心などを考慮に入れたなら、やはり責任に対しての比喻であるとするのが妥当ではないだろうか。³

この責任という属性に対して非常な強さで扱うバーチを見抜く形をとることにより、クーパーはフランスに対して何らかの働きを負わせたのである。一体何か。それは一言でいうならフランスのアメリカイズム、国としてのアイデンティティの提示である。アメリカ軍人と一緒だから幸せになれるという状況設定以上に、国家の責任に対して敏感なフランスは国のアイデンティティに対して深く関わりがあると考えられるのである。国家の責任を負ったバーチに対して共感を覚えるフランス、そしてそれを見抜くフランスはダンウーディーという愛国心の強いアメリカ軍人との間に子をもうける。息子のウォートン・ダンウーディー (Wharton Dunwoodie) はアメリカンアイデンティティと愛国心の合作であり、そして二人にとって愛の形である。この息子は国としての責任を見抜くフランス、すなわち国家のアイデンティティの具現化であるフランスと愛国心の結びつきを表すものである。フランスは国のアイデンティティという属性を持ち、それはダンウーディーという愛国

心という媒体により、息子の誕生、希望が見出されるのである。「彼の髪は金の小輪のように太陽の中で輝き」(“ His hair shone in the setting sun like the ringlets of gold ”)(401)、「強さと行動力のまさに調和を表す」(“ indicating a just proportion between strength and activity ”)(401)希望と想像力を感じさせる息子の誕生を、フランシスは経験するのである。このようにフランシスは、アメリカとしてのアイデンティティ、そして未来という文化的表出の役割を担っている。不透明、不確定の時代の書かれた『スパイ』はフランシスという文化的表出の役割を果たす登場人物の生成により、国としての未来像を示したわけである。混沌とした時代の中にフランシスという光を登場させたのである。

しかし、フランシスのような希望溢れるヒロインだけを持ってこの作品は、アメリカという国家の未来を声高に描いた作品であるとするのは早計である。なぜなら、作品中にはイギリスという属性に対して好意的と思えるような描写がいくつも存在するからである。イギリス寄りのサラを不幸にするから、この作品はイギリスに対してマイナスイメージだけを持っているとは言えないのである。ある批評家が述べているように「クーパーの偉大な美点の一つは、歴史を単純化しすぎないことである」(“ One of Cooper’s great virtue was his refusal to oversimplify history ”)(House 215)。それゆえ、時代の両面性、イギリスへの憧憬とアメリカへの愛国心という二つの面を持つ時代の特徴が作品中に見られるのも不思議なことではないのである。ここでは作品中に見られるイギリスへのプラス的描写を取り上げ、この作品がイギリスへの憧憬を表しているという事を確認してみたいと思う。

ウェルメア大佐はアメリカにとって敵の軍人であり、そして重婚の罪をおかすいわば憎むべき男のはずである。しかし、敵方の軍人に対してクーパーは次のような描写を行っている。

Colonel Wellmere was far from wanting that kind of pride which makes a man bear himself bravely in the presence of his enemies. (89)⁴

ウェルメア大佐は一人の男が敵を前にして示す勇敢な態度という誇りに関しては欠けるところが全くなかった。

この勇敢さという性格は我々が普通に考えれば望ましい性質のはずである。勇敢さとは、紳士性、不屈の精神と並んでイギリス人を描写する上で使われる形容詞の一つである。彼の描写はこれに留まらない。「彼は外見から判断する通り、立派であり」(“ He was too apt to judge from externals ”)(90)、彼の身に着けているゲートルは「とても清潔」(“ so clean ”)(89)である。彼は「きちんと歩く」(“ tread so regular ”)(89)。「これに加えて彼らはイギリス人であり、成功は確実なものであった」(“ In addition to all these, they were Englishmen, and their success was certain ”)(90)。本来ならば彼は重婚の罪を犯す人間であり、清潔という描写は当てはまらないはずなのである。単に身に着けているゲートルが清潔であるという形容を超えて、ここでのゲートルには彼の人間性への描写と考えることができるのである。なぜなら、上記の引用で示すように彼はイギリス人であり、成功が確実である、という確固とした評価を持った人間であるからである。そして外見から判断する通りの人間だからである。ジョージ・デッカー(George Dekker)はクーパーの人物描写があまりにも整然としていてステレオタイプであるとして批判しているが(49)、このデッカーの議論を考慮に入れたならウェルメア大佐もステレオタイプの登場人物であるという事ができる。ならば彼への描写がそのまま彼の人間性を表しているとも考えられるのである。

このように敵軍、そして重婚の罪を犯している男に対してもクーパーは望ましい評価を与えているのである。イギリス人に対してマイナス面とプラス面、両方の評価を与えているこの構造はイギリスへの反発と愛着という両面感情、アンビバレントな感情を表しているのである。この感情は当然のことながら、イギリスへの憧憬という感情が含まれているわけである。

ジェイ・フリーゲルマン(Jay Fliegelman)はアメリカ独立戦争をイギリスという父性への挑戦であるとしている(49)。イギリスという伝統と格式のある国に対して、若きアメリカ、そしてイギリス国内の宗教改革に反発したピューリタン達が海を渡ってアメリカへやってきた事実を考えれば、フリーゲルマンのこの考えは妥当である。ウィントン・ソルバーグ(Winton Solberg)も自身の著作の中でアメリカはイギリスの息子であるという事を明言している。⁵ 初期アメリカ社会を社会学の観点から議論する時に、イギリス文化の一構成要素とするアングロ・コンフォーミティ論として捉えるのはこの為である。

ジェイムズ・ウォラス(James Wallace)は『スパイ』を「父性と家族関係のおりなす複雑な様式」(“ a complex pattern of paternity and familial relations ”)(49)と評している。ウォラスは『スパイ』にウォートン家と政治上の動きである独立戦争という観点から、家族という点に焦点を当てて論を展開している。「クーパーは愛国心というテーマについてつむぐ」(“ Cooper wove his theme of patriotism ”)(50)としているが、ウォラスの提示した家族関係の要素を我々が注目してみるのも意味のあることではないか。

ウォートン氏、ハーベイ・バーチの父ジョニー・バーチ(Johnny Birch)等の父親としての登場人物の中で、最も注目しなければ、ハーパーとして身分を隠すジョージ・ワシントンである。ハーパーはバーチにスパイの任務を与えた重要人物であり、主人公バーチと共に作品中で表す働きというのは極めて重要

である。

ハーパーに対しての描写というのは、冒頭の場面からかなり特異である。嵐を避けて一時の宿を許されたハーパーは部屋の中でウォートン達と暖かい雰囲気の中会話をしている。ウォートンはタバコを吸い始めるがここでハーパーはこのような行動に出る。

The box from which Mr. Wharton had just taken a supply for his pipe was lying open, within a few inches of the elbow of Harper, who took a small quantity from its contents, and applied it to his tongue, in a manner perfectly natural, but one that filled his companion with alarm. (15)

ウォートン氏がパイプを吸うために取った箱は、ハーパーの肘のすぐ近くに開けたままになっていた。ハーパーはこの箱から少し中身をとって自分の舌へと運んだ。そのやり方はごく自然であったが、周りにいた人間をはっとさせるものだった。

宿を許された人間であるハーパーが勝手に家の主人であるウォートン氏の持ち物であるタバコを口にする場面である。見ず知らずの人間が、それも少し前に宿を許された人間が遠慮せずに行える行動であろうか。ここには、ハーパーの一角の人物であるという暗示、身分の高さの暗示が隠されているのである。宿を許されるという言わば、負い目を感じてしまうような状況でも彼は卑屈になることなく、自分の地位と身分の高さを周囲に感じさせてしまう人物なのである。彼は「サラ・ウォートンに対して手を貸して」(“ offered his hand to Sarah Wharton ”) (17) 一緒に部屋にはいる手伝いをするという、紳士的行為を第1章で行っている。彼は「旅行者」(“ traveler ”) (9) であり

ながら、何か「格式を感じさせる」(“impressive dignity”)(16)人物として描かれているのである。

このハーパーはバーチにとって父親的役割をなしているというのは、深読みしすぎであろうか。いやそうではない。ハーパーはバーチのとり様々な危険に対して評価と感謝を表し、できる限りのお礼として金を与えようとする。しかし、バーチは決して受け取ろうとしない。バーチは「迫りくる月日と明らかな貧困と戦う」(“struggling with advance of years and apparent poverty”)(400)事を余儀なくされるが、彼は金を受け取ろうとしないのである。バーチにとって友情が「イギリス国庫の金以上に大切な恵み」(“a blessing that I prize more than all the gold of England's treasury”)(399)なのである。バーチの示すハーパーへの敬意というのは大変なものである。様々な危険に逢いながらも任務を放棄することなく、自分の職務を遂行できたのはハーパーへの敬意と友情の念である。バーチはハーパー、そして今はジョージ・ワシントンである彼に向って「閣下は私の友人である」(“your excellency is my friend”)(399)と明言しているのである。

この友情という概念が愛によって結び付けられているのである。ハーパーという敬愛する人物を慕いそして任務終了後に初めて友人という言葉で表すのである。ここには我々が普通感じる父親的なものへの反発の感情はない。敬意と畏怖の感情である。ハーパーは旅行者として登場する。バーチは「行商人」(“peddler”)(51)である。この二人の彷徨い歩く存在としての属性は二人を結びつけるものである。「我々の状況は違っている」(“our situations are different”)(398)とするハーパーであるワシントンが述べているが、二人は真の友人としてそして任務を与えたもの、それを遂行したもの、何よりも自分の分身であるバーチの保護者として結びつけられているのである。この

ように考えれば、ハーパーはバーチにとって父親的役割を果たしているとするのは、無理のない仮定ではないだろうか。

ここで新たにもう一つの仮定を立ててみよう。ハーパーであるワシントンがイギリス的な役割を作品中でなしているという予想である。ワシントンは建国の父であり、純粋にアメリカを表す人物ではないか、という反論がすぐに聞こえてきそうである。しかし、ここまで説明したようにこの作品『スパイ』は二重構造が極めて重要な意味を表しているのである。ハーパーは権力、格式を代表とする人物であり、いわば伝統あるイギリス的な属性を帯びたアメリカ人なのである。ハーパーは権威の人間であり、たとえ敵国イギリスと戦っている人間ではあるものの身分の高さ、紳士性、格式等を考慮に入れたなら伝統あるイギリス的な属性を帯びているとする事が出来るのである。父親の役割を果たしているハーパーと息子の役割を果たしているバーチでは、たとえ友情という愛情で繋がってはいるものの、国のリーダーとしてのハーパーと孤独な行商人であるバーチとは全く置かれた立場が違うのである。

マイルズ・ウォリングフォード (Miles Wallingford) は『スパイ』を孤独な人間の社会への受け入れがクーパーの意図したことであるとしている(217)。確かにバーチは行商人という孤独なさすらい人である。それがハーパーという父性に認められ、彼の働きが評価されるわけである。バーチとハーパーの友情は孤独者としての個人であるバーチと国の代表としての衆を表すハーパーの個と衆の結びつきを表すものなのである。言い換えれば父親的なハーパーに息子的なバーチが受け入れられたのである。

ここでそろそろ、本稿の論題である作品中に見られる二重構造は一体何を表すのか、そしてその表す意味は文学史の中でどのように位置づけられるのかという問いに答えを出してみたいと思う。これまでの説明で明らかにはずである。不透明な時代に書かれたこの作品の二重構造はイギリスへの憧憬とアメリカへ

の愛国心という、アメリカ人の当時とっていた二つの感情を表しているのである。孤独者バーチ、彷徨い歩く独立した人間が父親的人物が受け入れられるこの作品はイギリス的価値観とアメリカ的価値観の調和を描いた作品なのである。そしてこの事が主人公バーチという個によって達成されるのである。クーパーにとってアメリカのピューリタニズムは曲解であるとある批評家が言っているが(House 47)、ピューリタニズムという共同体の建設という衆的価値観のアンチテーゼとしてバーチという個人を扱ったのである。新天地におけるピューリタン社会では厳しい環境に打ち勝つべき手段として、共同体の概念が強調された。ジョン・ウィスロップ(John Withrop)が呼び掛けた丘の上の町の建設思想も公共を優先し、衆を強調するものである。そのアンチテーゼとしてクーパーは個の物語を『スパイ』に示したのである。そしてバーチという個人がアメリカとイギリスの調和という役割を達成したのである。この作品はイギリスへの憧憬とアメリカへの愛国心を描き、その二国の精神的調和を描いた作品である。そして個としてのバーチの活躍は続く時代のロマン主義にも通じるテーマなのである。個人的価値観を重視するアメリカロマン主義文学の開花に先立つ作品と『スパイ』は言えるのではないだろうか。実際に30年、40年後にはアメリカロマン主義といわれる文学思潮が生まれてくるのである。

注

1. 本論文中、『スパイ』への言及は、James Fenimore Cooper, *The Spy*, ed. Wayne Franklin に拠る。
2. 例えばマイナーキャラクターである Katy Haynes 等はどうであろうか。Katy Haynes はバーチの妹として、彼に早く結婚して放浪生活をやめるようにアドバイスをする。バーチにとっては彷徨うことが彼の自由を確立させるものである。このバーチの自由の強調という意味での Katy Haynes のアドバイスは作品中で意味をなしていると読む事も可能なのである。バーチの自由が彼の最終的な任務遂行という勝利を得るための絶対条件だからである。
3. 荷物を責任のモチーフと考えるのは決して突飛なことではない。当然考えられるエピソードというのはイエス・キリストが十字架を背負う行為である。十字架という荷物はキリストの責任である人類の救済という負荷である。英語においても日本語においても負荷と責任とは類似の意味で文脈中にしばしば使われる。
4. この描写に対しての反論のために一言付す。確かにこの描写の直後にウェルメア大佐が相手にしたのは、民兵などのアメリカ正規軍ではなく彼のプラス的描写にはならないのではないかという反論である。しかし、それは独立戦争時のアメリカ軍の組織の一事実としての描写であり、正規軍とは堂々と戦っていないという事にはならない。正規軍と戦わず、民兵との戦いにのみ勝利を得ていたという読みは可能であるかもしれない。

いが、この論文に挙げた箇所をイギリスのプラス的评价ととらえる方が自然ではないだろうか。

5. ソルバーグ博士アメリカ思想史の専門家であり、アメリカの精神構造について極めてわかりやすく説明している。日本についての言及も見られ、アメリカのみならず、日本史的観点から、アメリカ思想史を結び付けており、興味深い。アメリカ思想史の入門書として博士の『アメリカの知的伝統』は大変便利である。この書籍についての情報は参考書目を参照せよ。

引用·参考文献

- Clymer, W.B.Shubrick. *James Fenimore Cooper*. New York: Haskell Publishers, 1968.
- Cooper, James Fenimore. *The Spy*. Ed. Wayne Franklin. New York: Penguin Books, 1997.
- Emerson, Ralph Waldo. “ The American Scholar ” Emerson on Transcendentalism. Ed. Edward L. Ericson. New York: The Ungar Publishing Company, 1986. 49-70.
- Gardiner, W.H.. “ The Spy. ” North American Review July 1822: 250-82. Fenimore Cooper: The Critical Heritage. Ed. Gorge Dekker and John P. McWilliams. Boston: Routledge and Paul, 1973.
- Grolier International. *Grolier Academic Encyclopedia*. New York: Grolier International, 1993.
- House, Kay Seymour. *Cooper's Americans*. Ohaio: Ohio State University Press, 1965.
- Irving, Washington. *The Sketch-Book of Geoffrey Crayuton, gen*. Ed. Susan Manning. New York: AMS Press, 1973.
- Kateb, George. *Emerson and Self-reliance*. Lanham: Rowman and Littlefield, 2002.
- Molotsky, Irvin. *The Flag, the Poet and the Song: the story*

of the Star-Spangled Banner. New York: Penguin,
2001.

Nevius, Blake. *Cooper's Landscape: An Essay on the Picturesque
Vision*. Los Angeles: University of California Press,
1976.

Rans, Geoffrey. *Cooper's Leather-Stocking Novels: A Secular
Reading*. North Carolina: The University of North
Carolina Press, 1991.

Ringe, Donald A.. *James Fenimore Cooper*. New Haven: Twayne
Publishers, 1962.

Wallace, James D.. “Cultivating an Audience: from *Precaution*
to *The Spy*” *James Fenimore Cooper: New Critical
Essays*. Ed. Robert Clark. London: Vision Press,
1985. 38-54.

Williams, Gary. *Notions of Americans: picked up by a
travelling bachelor*. New York: State University of
New York Press, 1991.

ソルバーグ、ウイントン『アメリカの知的伝統』東京、金星堂、1983年。

大井 浩二『旅人たちのアメリカ：コベット、クーパー、ディケンズ』東京、
英宝社、2005年。